３．文の安定性＝文末を重たくして重心を下げる
膠着語に属する日本語は＜文の安定性＞という意識が薄い。助詞が意味のパーツを無秩序につなぎ語順は極めて適当で、述語動詞さえ文末に来れば良い。実は、＜語順の重要性＞と＜文の安定性＞とは比例関係にある。なぜなら、語順を操作して文を安定させようとするからだ。英語は語順が命。当然＜文の安定性＞にこだわる言語だと言えるだろう。文を安定させるには、文末を重たくして重心を下げることになる。具体的には次の２つの方法しかない。

・長くて重たい語句は後ろに回る
・短くて軽い語句は前に回す

３－１後置修飾のパターン５つ
原則として２語以上の長い飾りは名詞の後ろに回される。名詞を飾っているのだから当然形容詞。図にすると以下の通り。

a　book

① **to** read today
② deal**ing** with Japan
③ **written** in English
④ **which** Father bought for me
⑤ **on** the desk

特に①②③は例題１３を解くための鍵になるので、しっかり記憶しておくこと。では順番に解説してゆくことにする。

３－１－①後置修飾その１＝不定詞の形容詞用法
＜例題１２＞全統マーク模試
I'v been looking for (　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　), but can't find one anywhere.

① a book　　② me　　③ my history assignment
④ to help　　⑤ with

I'v been looking for (a book)(to help)(me)(with)(my history assignment), but can't find one anywhere.
→歴史の宿題をやるのに役に立つ本を探しているのだが、どこにも見つからない。
・消去の法則を用いて、後半のつなぎ語<but>と動詞<can't find>を消し去っても良いのだが、つなぎ語が等位接続詞の場合はその左右対称性を大いに利用したいところだから、消すのがもったいない。
・前半の前置詞<been looking **for**>と結びつく名詞候補は<a book>と<my history assignment>の２つ。
◎後半に<,but can't find **one** ～>とあり、等位接続詞 but の左右対称性を考えると、<one>は<looking for>と結びつく名詞を指すはずだ。もしそれが<my history assignment>ならば<one>ではなく<it>になっているはず。<a book>だからこそ<one>で受けることが出来る。
・つなぎ語は<but>１つで、動詞は<have been looking for>と<can't find>の２つだから計算が合う。
・残る<to **help**>の可能性は「副詞」か「形容詞」。「名詞」にはなり得ない。
・動詞<help>直後の文型パターンを考慮すると<help 人 with 事柄>に思い当たる。

★次の表現が狙われる！
a book
to read today

３－１－②後置修飾その２＝分詞の形容詞用法
＜例題１３＞全統マーク模試
"I'm asking you to reconsider the whole plan, sir."
"No, way.　I'm the boss here, and I'm not going to have anyone (　　)(　　)(　　)(　　)(　　)."
1

① do　　② me　　③ telling
④ to　　⑤ what

"No, way.　I'm the boss here, and I'm not going to have anyone (telling)(me)(what)(to)(do)."
→「計画全体を見直していただきたいのですが。」「とんでもない。ここでは私が責任者だし、何をすべきかの指図は誰からも受けないよ。」
・等位接続詞<and>が結ぶものは「文, and 文」だから、消去の法則を用いて動詞<am>と共に消し去る。
・<what>はつなぎ語候補なのだが、残りの選択肢に文を構成する能力はないので、<what to do>の「疑問詞＋不定詞」で使う。つなぎ語１に動詞が２で計算が合う。
◎<I'm not going to have anyone>で「SVO」の文が完結しているので、①～⑤の選択肢全てに<anyone>を飾る形容詞の機能を割り当てることになる。(注１)
・<tell>→誰に→何をを考慮して組み上げる。
★次の表現が狙われる。
a book
dealing with Japan

■注１
第３文型「SVO」の文が完結していると言われてもピントこない者が多いと思う。<have>が出てくると第５文型を取ることが多く、「使役」「恩恵の受け身」「被害の受け身」等の可能性を考えたのではないか？受験生としてはそれも悪くはないのだろうが、「SVOC」は元々は「SVO」の３型から派生してきたことを覚えておくのも良いだろう。

S　V　O
原形不定詞
現在分詞　} C
過去分詞

第５文型の主要構成要素は基本的には SVO までで、C は O を飾る形容詞に過ぎない。冒頭で説明したように、Ｃを構成するどの要素もすべて形容詞。２語以上なのだから当然飾られる名詞の後ろに置かれ、それでで文が安定する。

①	I	had	my husband	(**to**) give up smoking.
②	I	had	a new house	**built** in Nagoya.
③	I	won't have	my son	wear**ing** his hair long.
	S	V	O	C

だから上の英文は３つとも「ＣするＯを持つ」が原義となる。
①タバコをやめる夫を持つ
②名古屋に建設される新しい家を持つ
③髪の毛を長く伸ばしている息子を持ちたくない。
Ｏが「人」か「モノ」かによって、「人はする・している」「モノは人によってされる」と発想すれば見誤ることも少なくなる。一般的な文法分類ではそれぞれ次のように言われている。
①使役で「have+人+原形不定詞」（～させる）
②被害・恩恵の受け身で「have+物+過去分詞」（される・してもらう）
③容認拒否で「won't have+人+現在分詞」（させるわけにはゆかない）
さて、どちらの方が実用的だと思うかな？

③容認拒否の現在分詞には「不満・非難」の意味が込められている。
He is always **complaining** about something or other.
あいつはいつも何かにつけ愚痴をこぼす。
③には使役の用法もあり会話表現として良く用いるが、入試では希にしか出題されない。
I had my cat feeding on canned food.
ネコに缶詰のエサを食べさせた。

３－１－③後置修飾その３＝関係詞
＜例題１４＞１９９９年度センター試験・本試・問２Ｃ②
"The shop will be closing soon.　Are you ready to go?"
"Well, (　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　) list."
① all　② is　③ I've got
④ the shopping　⑤ to do　⑥ to get

"Well, (all)(I've got)(to do)(is)(to get)(the shopping) list."
→「もうすぐ店が閉まるけど、出かける準備はいいの？」
「ええ、あとはショッピング・リストを取ってくるだけよ。」
◎後半部分の<list>は普通名詞なので単独で存在できずに冠詞が要る。だから直前には<the shopping>が来なくてはならない。
・動詞候補は<is>と<I **have got**>の２つ。しかし、つなぎ語になるものは与えられていない。
・主語候補は<all>と<**I**'ve got>。動詞候補も２つなので、それぞれ割り振ってやれる。
◎２つの動詞があるので、つなぎ語が１つ必要。ここでつなぎ語の省略に思い至るかがポイント。
・会話表現の「I've got to ～」は「I have to ～」と同義。それなら、<I've got to do ～>か<I've got to get ～>しかあり得ず、<I've got to get the shopping list.>とやると残りの選択肢の収まりがつかないので<all>を主語にしてみる。
◎主語候補<all>のパターンから<All (that)文 is (to)～>に思い至るかどうかがポイント。

★次の表現が狙われる！
１日目の「１．語句整序問題攻略の基礎」③でも書いたが、「all」は１語の代名詞として主語にもなれば、形容詞にもなる。「all」の慣用表現も含めると厄介な語。次の可能性を考慮して文を組むと良い。
①代名詞　→ **all [that]文 is [to]～**
All you have to do is [to] read this book for your assignment.
宿題をやるには、君はこの本を読みさえすればよい。
All I can do is [to] put you up for the night.
泊めてあげることしかできないよ。
All I can offer you is coffee.
コーヒーしか今家にないんだけど、悪いね。
②形容詞　→ all は定冠詞 the に先行する
③副詞　→ **all the+better[worse]+for ～**＝～して、ますます・・・
I liked him all the better for his confession.
彼の身の上話を聞いて、ますます彼のことが好きになった。
I hated him all the worse for her behavior.
あたしは彼の振る舞いを見て、ますます彼が嫌いになった。
→ **all at once(=suddenly)**＝突然
I was walking along the crowded street when all at once I heard a shrill cry.（上智大）
人でごった返した通りを歩いていると、突然甲高い叫び声が聞こえた。
④慣用表現→ **all but(=almost)**＝ほとんど
He all but forgot his father's stories.（中京大）
彼は父親から聞いた話をほとんど忘れてしまった。
→ **for[with] all ～(=in spite of ～)** ＝～にもかかわらず
For all his wealth, he doesn't seem happy.（青山学院大）
For all that he is wealthy,～（死語）
With all his wealth,～
Though he is wealthy,～
In spite of his wealth,～
裕福であるにもかかわらず、彼は幸せそうには見えない。
→ **once [and] for all** ＝これを最後に、きっぱりと
Please make up your mind once and for all.

＜例題１５＞１９９８年度センター試験・本試・問２Ｃ①

<The writer> thinks that in Japan <decisions> are often made in ways which (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) countries.

① from　② of　③ those　④ are different
⑤ some other Asian

The writer thinks that in Japan decisions are often made in ways which (are different)(from)(those) (of)(some other Asian) countries.

→その著者は、日本では他のアジア諸国とは違ったやり方で物事が決まることがしばしばあると考えている。
・消去の法則を用いて、完結している前半部分の動詞<thinks>、つなぎ語<that>を消し去る。すると、<which>以降の<ways>の飾りだけを考慮すればよいことになる。
・空所直後の<countries>は普通名詞だから、文脈にもよるが<in Japan>との対比・対称を考えると、単独では存在し得ないと考え⑤と結んで<some other Asian countries>にする。そうすると<in Japan>との対比も浮き立つ。
・動詞候補は<are often made>と③<**are** different>の２つ、つなぎ語が<which>１つで計算が合う。
・残りのパーツから<are different from>と「the ways」の繰り返しを避ける<those of ～>に思い至ればＯＫ。

★次の表現が狙われる！
名詞の繰り返しを避ける「that」と「those」
対比・対称文の中で多用されるのが、「the+単数名詞＝ that / the+複数名詞＝ those」。必然的に比較構文に頻出することになる。

A is as ～ as B.
A is ～ er than B.
A is different from B.
A is the same as B.
more A than B
A rather than B

３－１－④後置修飾その４＝前置詞＋名詞

＜例文１６＞２００３年度センター試験・本試・問２Ｃ①

He arrived early at the ticket office only (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) for the show had already been sold out.

① to be　② that　③<the tickets>　④ told
⑤ all

He arrived early at the ticket office only (to be)(told)(that)(all)(the tickets) for the show had already been sold out.

→彼はチケット売り場に早く着いたが、結局そのショーのチケットはもう売り切れだと言われただけだった。
・<only>の直前で文は完結している。
◎空所直後の「前置詞＋名詞」に注目する。役割は形容詞か副詞。最後の空所には<主語>が来るはずだから、その主語を飾る形容詞の役割を<for the show>が果たしていると考えられる。
・後半の動詞<had already been sold out>の主語候補は<the tickets>と<all>だが、<all>は後に回す。
・動詞候補は全部で３つ。一方つなぎ語は<that>しかないので計算が合わない。どこかに別のつなぎ語が隠れているはず。
◎結果の不定詞はつなぎ語。(注２)<only>とセットで使う<only to ～>に思い至るかどうかが鍵。

■注２
結果の不定詞を絵にすると次のようなイメージになる。

原因 →to 結果

前置詞の to が出てきたら→（矢印）を書くように言い続けてきたね。結果の不定詞は文字通り不定詞なのだから、矢印が付いていることを不審に思う者もいると思う。しかし、元来「to」には＜方向を指をさす＞働きしかない。

I want →to kiss her.

この英文には<want>と<kiss>の２つの動詞がある。それを真ん中でつないでいるのが不定詞の to だね。この to には次の２つの役割がある。

①１文には１つの動詞が原則なので、真ん中に to を入れて<kiss>を動詞ではなくしてやる。
②<want>が目指す行為を指でさす（欲しいモノには to は不要）。

②の役割を考えると、不定詞の to にも方向があることが分かるね。話を結果の不定詞に戻そう。不定詞の to にも指をさす働きが元々あることが分かったなら、上に書いた結果の不定詞のイメージが理解できるんじゃないかと思う。

原因	→	結果
She **lived**	to	**be** eighty.
She **opened** the box	to	**find** it empty.
She **went** to America	only to	**be** disappointed.
She **went** to America	never to	**return** again

彼女は生きながらえた	その結果	８０才になった
彼女は箱を開けた		中身がカラッポだと分かった
彼女はアメリカに行った		ガッカリしただけだった
彼女はあめりかに行った		二度と帰ってこなかった

結果の to を挟んで左右に動詞があるわけだから、結果の不定詞も立派なつなぎ語だとわかる。クイズ作成者がいつも結果の不定詞だと直ぐに分かるパーツを選択肢として提供してくれるとは限らない。だから結果の不定詞をつなぎ語だと意識しておかないと解けない問題がある。

★次の表現が狙われる！
結果の不定詞は次の４つのパターンしかない。
to be ～　　＝その結果～になる
to find ～　　＝その結果～だと分かる
only to ～　　＝その結果～しただけだった
never to ～　　＝その結果決して～しなかった

３－１－⑤同格表現
後置修飾形容詞と同格とを一緒にするのは少々乱暴だが、「長くて重い語句は後ろに回す」の枠で括ることにする。that が関係代名詞であろうと、従属接続詞「ことシリーズ」であろうと、同格であろうと、つなぎ語であることには変わりはない。

＜例題１７＞２００２年度センター試験・本試・問２Ｃ③
Barbara has always been interested in history, so the news (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) her very sad.

① made　② that　③ the museum
④ to close　⑤ was

Barbara has always been interested in history, so the news (that)(the museum)(was)(to close)(made) her very sad.
→バーバラはずっと歴史に興味があったので、その博物館が閉鎖になると言う知らせを聞いてとても悲しかった。
・<so>までで文が完結しているので、消去の法則を使って動詞<has always been>とつなぎ語<so>を消し去る。
・直後の<the news>は主語にしかなり得ない。
・動詞候補は<made>と<was>の２つ。つなぎ語は<that>でその直後の主語は<the museum>しかあり得ない。
・後半の<her very sad>を考えると、「the news made her very sad.」と文を組まざるを得ない。
・つなぎ語<that>の役割を考慮すると同格の that 以外あり得ない。

３－２形式主語
ｉｔを含む語句整序は概して厄介だ。語句整序の定石である「動詞→つなぎ語→名詞→形容詞・冠詞→副詞」の手順で攻めても上手く行かないことが多い。そこで、ｉｔを含む構文パターンから攻めるのも手だ。

・形式主語
・形式目的語
・強調構文
・非人称のｉｔ（時間・距離・明暗・天候・状況）

非人称のｉｔは形式主語と区別が付きにくい。時間・距離・明暗・天候・状況は対象を指でさすことができないので非人称の it だと直ぐに分かる。しかし<It seems that ～>の場合はそんなに簡単ではない。一般的に形式主語を真主語と置き換えて文が成り立つかどうかで形式主語と非人称とを区別するのだが、機能面で差異はなく、形式主語を真主語に置き換えること自体ＥＴ型の頭でっかちの不自然な英文になるのだから、この区別自体がほとんど意味がない。

It seems that John dislikes his boss.　→ That John dislikes his boss seems.　（Ｘ）＝非人称
It is obvious that John dislikes his boss. → That John dislikes his boss is obvious.（◎）＝形式主語

だから、ここでは形式主語と非人称の it とを厳密には区別しないことにする。

３－２－①Ｉｔ～ｔｏ・・・（～ｉｎｇ／ｔｈａｔ＋文）
＜例文１８＞全統マーク模試
She is so (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) to make an appointment with her.

① almost impossible　② busy　③ is
④ it　⑤ that

She is so (busy)(that)(it)(is)(almost impossible) to make an appointment with her.
→彼女はとても忙しいから、会う約束をするのはほとんど不可能だ。
・動詞は２つの<is>、つなぎ語候補は<that>１つだから計算が合う。
・空所直前の<so>と対応するつなぎ語は結果・程度の that しかない。いわゆる「so ～ that」構文。
・that+文の主語候補は、<to make an ～>の役割を考慮すると、形式主語の<it>しかない。
★次の表現が狙われる！

it ～ { to ～ / ～ ing / that+文 }

形式主語 it の真主語は上の３つ以外はあり得ない。また、真主語が動名詞「～ ing」になるのは、格言・ことわざの類である。なぜなら、ことシリーズの１つである動名詞は「もうやってしまったこと、何度も繰り返していること」、「一度こぼれてしまったミルクなんてもを嘆いてみてももしゃあ～ないんよ」などの様に、人がみんな何度も繰り返しやるような一般的な事柄を扱うからだ。

It is no use cry**ing** over spilt milk.

＜例文１９＞早稲田大・理工
Has (　　)(　　)(　　)(　　) valuable?
① that　② might be　③ occurred to you
④ it ever　⑤ this old book

Has (it ever)(occurred to you)(that)(this old book)(might be) valuable?
→この古い本に価値があるなんて思ったことがあるの？
・疑問文であることを考慮すると、現在完了の疑問文しかあり得ない。
・文頭の<Has>につながる過去分詞は<**occurred** to you>しかない。
・２つ目の動詞は<might **be**>で、つなぎ語が<that>１つだから計算が合う。
・前半の主語候補は形式主語の<it>、後半の主語候補は<this old book>だから、つなぎ語は従属接続詞の that。

★次の表現が狙われる！
＜ It+Ｖ+that 文＞
It seems that 文　　→ S+seems to ～
It appears that 文　　→ S+appears to ～
It happens that 文　　→ S+happens to ～
It proves that 文　　→ S+proves to ～
It turns out that 文　　→ S+turns out to ～

＜ It is+過去分詞+that 文＞
It is said that 文　　→ S+is said to ～
It is known that 文　　→ S+is known to ～
It is thought that 文　　→ S+is thought to ～
It is believed that 文　　→ S+is believed to ～
It is expected that 文　　→ S+is expected to ～
It is found that 文　　→ S+is found to ～
It is requested that 文　　→ S+is requested to ～
It is reported that 文　　→ S+is reported to ～

＜例題２０＞２００３年度センター試験・追試・問２Ｃ②
Before I went to the U.S., <I> had (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) in a foreign country.

① would be like　　② what　　③ it
④ no idea　　⑤ to live

Before I went to the U.S., I had (no idea)(what)(it)(would be like)(to live) in a foreign country.
→アメリカに行く前は、外国で暮らすのがどんなことなのか全然分からなかった。
・前半で文は完結しているので、消去の法則を用いて<Before>と<went>を消し去る。
・空所直前の<had>に注目する。過去分詞が選択肢にないので過去完了形は成立せず、<had>は動詞。
・<would **be** like>も動詞。ならば<what>はつなぎ語にしないと計算が成り立たない。
・<I had>の目的語は<it>と<no idea>のいずれか。<it>と<**to** live>に注目すると<I had no idea ～>。
・すると、つなぎ語<what>の直後は<it would be like ～>。

★次の表現が狙われる。
I have no idea
① **of** living underwater.
② **that** it is possible for people to live underwater.
③[of] **what** it is like to live underwater.

①海中で暮らすと言う発想
②人が海中で暮らすのは可能だという発想
③海中で暮らすことがどういう事なのかという発想

③には注意が必要。同格の of の直後に疑問詞が来たら、of が省略されることが多い。

３－２－②Ｉｔ～ｆｏｒ・・・ｔｏ／Ｉｔ～ｏｆ・・・ｔｏ
この項目に関して１つ言っておきたいことがある。これが分かってないと、次の形式目的語の問題が解けない。

for me to read this book in a day	is	difficult
A	=	B

<事がら>を主語に要求するので、主語は「僕が一日でこの本を読むこと」。

頭でっかちのＥＴ型の英文だから安定が悪い。

It	is	difficult
A	=	B

for me **to** read this book in a day

長い主語を後ろに回したことで、文がケツのデカイ安産型になって安定した。

ここまでは多分問題はないと思う。これが<It ～ for ～ to>と言う公式モドキになり、似て非なる<It ～ of ～ to>と並列に扱われるのでこんな変な英語を正しいと思いこんでしまう。

人に対する善し悪しの判断は of
頭でっかちの長い主語

Of you to show me the way is kind.

この形容詞は<人>を主語に要求するのだが、主語はどう見ても＜事がら＞なのでおかしい！！

→ **It** is kind **of** you **to** show me the way.

後ろに回して＜ It ～ of ～ to ＞!!

こんな思い違いがないことを願っている。正しくは次のようになる。

To show me the way	is	<kind> of <you>
A	=	B

人の性質のｏｆ。＜性質ｏｆ人＞の語順で用いて、これが１セット。ｏｆ　ｙｏｕだけが文頭に出ることはない！！

主語は＜事がら＞のままだけど、＜ kind of you ＞になり「あなたの持つ親切な性質」の意味を表しているので文が成立する。

とりあえず黒本（河合のマーク模試に出題された過去問集）から該当する問題を引っ張っては来たが、見ただけで解ける愚問だから飛ばしても良い。

＜例題２１＞全統マーク模試

(　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　) his own opinion.

① for　② it　③ to have
④ anybody　⑤ good　⑥ is

(It)(is)(good)(for)(anybody)(to have) his own opinion.

→誰もが自分の意見を持つのは良いことです。
・つなぎ語なし、動詞１つのクダラナイ単文。
・主語候補は<it>と<anybody>。<To have it is 〜>は意味不明。
・<it>が含まれているので、形式主語のパターンに持ち込めるかどうかを検討する。
・<it 〜 for 〜 to>のパターンを当てはめてみる。

＜例題２２＞全統マーク模試

It was careless (　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　).

① your umbrella　② leave　③ you
④ in the train　⑤ of　⑥ to

It was careless (of)(you)(to leave)(your umbrella)(in the train).

→電車に傘を忘れてくるなんて、君はうっかり者だね。
・主語<It>が与えられている。
・つなぎ語がないのに動詞が２つ。つなぎ語の省略よりも<it 〜 of 〜 to>に注目する。
・<It>を形式主語と捉えないと後続の語句に役割を割り振れない。

３－２－③Ｉｔ～疑問詞＋文

＜例題２３＞全統マーク模試

(　　)(　　)(　　)(　　)(　　)(　　) so long as it is done.

① it　② it　③ does
④ little　⑤ matters　⑥ who

(It)(matters)(little)(who)(does)(it) so long as it is done.

→それをやってくれさえすれば、誰がやるかはたいした問題ではない。
・動詞候補は<matters>と<does>の２つ。疑問文ではないので<who>はつなぎ語だから計算が合う。
・<matter>は形式主語<it>を主語にして疑問文・否定文でしか用いないのを考慮すると、<It doesn't matter>ではなく<It matters little 〜>。
・真主語は「疑問詞 who ＋文」の可能性を考える。

★次の表現が狙われる！
It doesn't matter **what** you may do.
It doesn't matter **that** we are not millionaires.
It doesn't matter **whether** it rains or not.

３－３形式目的語

さあ、何も言いません。解けるかどうかやってごらん。

＜例題２４＞２００２年度センター試験・追試・問２Ｃ①

Everyone thought (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) to lock the door when you went out.

① of　② you　③ it
④ to forget　⑤ very careless

Everyone though (it)(very careless)(of)(you)(to forget) to lock the door when you went out.

→出て行くときに鍵をかけ忘れるなんて、皆は君のことをひどい虚け者だと思っていたよ。
・消去の法則を用いて、つなぎ語<when>と動詞<went out>を消し去る。
・動詞は<thought>１語でつなぎ語はないので計算は成り立つ。
・<Everyone thought of 〜>の組み合わせは<Everyone thought of it.>にしかならず、残りのパーツが余る。
・「名詞 of 名詞」も<you of it>と言う意味不明のものしか出来上がらない。
◎ならば、「性質の of」で<very careless of you>、<it>を形式目的語と捉えられるかどうかが鍵。

＜例題２５＞慶応大・法

You must see (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) comes to her.

① it　② that　③ harm
④ to　⑤ no

You must see (to)(it)(that)(no)(harm) comes to her.

→彼女がひどい目に遭わないように気を付けなさい。
・動詞は<must see><comes>の２つで、つなぎ語が②<that>１語だから計算が合う。
・⑤<no>は「ゼロの」の意味の形容詞だから、結びつく名詞は③<harm>しかない。
・ならば、つなぎ語 that 直後の文は<it comes to her>か<no harm comes to her>のどちらか。
・④<to>が不定詞の to なら、部品に動詞の原形があるはずだが、どこにもないのでこの to は前置詞。
・「前置詞＋名詞」だから、可能性は<to it>しかなくなる。
◎ここまで考えて<see to it that 〜>が思い浮かばなければ、構文の勉強をやり直すべきだ。

★次の表現が狙われる！
think
find　} it +形容詞 to 〜

make it a rule to 〜
take it for granted that+文
see to it that+文

３－４句動詞の目的語が代名詞の場合
文の安定性を増すために、長くて重たい語句を文末に回すだけではなく、短くて軽い語句を安定した固まりに割り込ませることがある。

He put on **his coat** hurriedly.
He put **his coat** on hurriedly.
He put **it** on hurriedly.

「名詞」は単独で存在することがほとんどなく、冠詞や人称代名詞を伴っているので「長くて重たい」。一方「代名詞」は名詞の代用として単独で用いるので「短くて軽い」。句動詞の目的語が「名詞」の場合には、目的語の定位置である文末に置いても、句動詞に割り込ませても文は安定する。句動詞の目的語が「代名詞」の場合には、文末が軽くなり文が安定しないので、句動詞に割り込ませることになる。

同じことが倒置表現である「ＳＶＣ」の「Ｃ」を文頭に回し強調する時に起こる。

The people are unlucky who don't like their work.
→ Unlucky are the people who don't like their work.

They are unlucky who don't like their work.
→ Unlucky they are who don't like their work.

「Ｓ」が代名詞の場合「ＣＶＳ」にすると文末が軽くなり安定性に欠ける。そこで「ＣＳＶ」の一部逆転型にして、文末に「ＳＶ」の文の基本構造を保つことで安定性を保つ。

＜例題２６＞全統マーク模試

David used to enjoy playing tennis but (　　)(　　)(　　)(　　)(　　) his knee injury.

① because　② gave　③ of
④ up　⑤ it

David used to enjoy playing tennis but (gave)(it)(up)(because)(of) his knee injury.

→デーヴィッドは以前はテニスを楽しんでいたのだが、膝のけがのせいで止めてしまった。
・消去の法則を用いて、つなぎ語<but>と動詞<used to enjoy>を消し去る。
・<but>以下の文に主語があるのなら、主語候補は<it>しかない。しかし動詞候補 give の目的語がなくなるので、主語が<but>を挟んで共有されていることに気づく。
・動詞候補は<give>だが、<give up>にしないと残りの選択肢に役割を割り振れない。
・もし<because>がつなぎ語で直後に文を従えるならば、もう１つ動詞候補が必要だがそれがないので、<because of 〜>の可能性を考慮する。
・<it>の位置に注意が肝要。